

# 『法句經』の仏教保育への展開に関する考察

岡本啓宏

A study on the development of "Dhammapada" in Buddhist childcare.

Keikoh OKAMOTO

『法句經 (Dhammapada)』は、古来より多くの仏教徒に広く読誦されてきたパーリー語で書かれた原始経典の一つである。その内容は26章に分類され、423の詩で構成され、お釈迦様の生の言葉に一番近いものであると考えられている。そして真の人間を的確に捉え、人間の優しさ、命の尊さ、愛の大切さなど、人間の持つ価値が的確に表現されている。それ故に自分自身の生活の中で、様々な困難に出会った時など、その解決のための指標となる教えであるといえる。そこで本論では、この『法句經 (Dhammapada)』の教えを公益社団法人日本仏教保育協会が提唱する「仏教保育三綱領」(「慈心不殺」、「仏道成就」、「正業精進」)に三分類することによって、仏教保育の現場に生かすことのできる教えを導き出すものである。そして『法句經 (Dhammapada)』の教えが、仏教保育の実践において具体的な指標となる教えを導き出すことを目的としている。

キーワード…『法句經』、仏教保育、仏教保育三綱領、命の尊厳

## 1. はじめに

今日、仏教寺院などを中心に設立、運営され、仏教保育を提唱、実践している各幼稚園・保育所の掲げる教育・保育方針は、それぞれの園の方針に基づき種々に異なっている。ただし、共通する部分も多々存在している。その共通する部分を挙げると次のようになる。<sup>①</sup>

- ・ 生命の尊さに気づき、豊かな感情を育てる
- ・ 優しさと感謝を学び、心と身体の丈夫な子を育てる
- ・ ものごとの善悪をわきまえる力を持つこと
- ・ 生命を大切にし、思いやりのある子を育てる
- ・ すべての子を仏の子として一人ひとりを大切にす
- ・ すべての命あるものに対して思いやりの心を持ち、感謝や反省の心を育てる

・ 感謝の心を育んでいのち輝く人となる

・ 明るく(仏)、正しく(法)、なかよく(僧)

・ 慈心不殺、仏道成就、正業精進 (『仏教保育三綱領』)<sup>②</sup>

などの教育・保育方針を掲げている園が多い。その中でも公益社団法人日本仏教保育協会が提唱する「仏教保育三綱領」(「慈心不殺」、「仏道成就」、「正業精進」)をその中心に掲げて教育・保育指針としている園が多い。即ち、この公益社団法人日本仏教保育協会の「仏教保育三綱領」は、仏教保育を提唱、実践している各幼稚園・保育所において、教育・保育の中心に据えられている。

そこで本論では、真の人間を的確に捉え、人間の優しさ、命の尊さ、愛の大切さなど、人間の持つ価値が的確に表現されている『法句経(Dhammapada)』の教えを、幼児期の発達に即した内容に基づいて、仏教保育の現場にどのように生かすことができるか、そして保育者の

日々の保育の具体的な示唆となる教えを導き出していくことを目的とする。その際に大切なことは、幼児期の教育・保育に直接関わる保育者の仏教理解が前提となるもので、保育者の果たす役割が極めて大きい。そこで現場の保育者が保育の現場に展開できる教えを導き出すものとするものである。

## 2. 『法句経』の説く主旨と、仏教保育における重要性

(1) 『法句経(Dhammapada)』とは

『法句経(Dhammapada)』は、お釈迦様の語ったといわれる詩の選集で、パーリー語で書かれた原始経典の一つである。その内容は26章に分類され、423の詩で構成されている。この『法句経(Dhammapada)』は、お釈迦様の生の言葉に一番近いものであると考えられ、上座部仏教の中では現在も最高の仏教聖典として尊ばれているものである。その内容は、423の短い詩の中に、平易な言葉で、誰もが理解可能なものではあるが、同時にその説かれる教えの内容はとても深いものである。

この『法句経(Dhammapada)』は古来より多くの仏教徒に読誦されてきた聖典であり、異本も多く、漢訳には、『法句経(2巻)』(『大正新脩大藏経』本縁部(下)第4巻210p559a~p575b)、『法句譬喻経(4巻)』(『大正新脩大藏経』本縁部(下)第4巻211p575b~p609b)などがあり、日本語訳には、友松円諦訳『法句経』(講談社学術文庫)、中村 元訳『ブツダの真理のことは 感興のことは』(岩波文庫(岩波書店)、萩原雲来訳『注』法句経』(岩波文庫(岩波書店)、その他チベット語訳など多くの翻訳、解説がなされている。本論においては、中村 元訳『ブツダの真理のことは 感興のことは』と友松園諦訳『法句経』の二つの訳を対比しながら検討を進める。

そしてこの『法句経(Dhammapada)』の内容は、自分自身の生活の中で様々な困難に出会った時など、その解決のための指標となる教えであり、仏教保育の現場における問題解決、そして子どもたちを導く指標となる教えであるといえる。

章「地獄」(306～319)、第23章「象」(320～333)、第24章「愛執」(334～359)、第25章「修行僧」(360～382)、第26章「バラモン」(383～423)の26章423の詩から構成されている。この『法句経(Dhammapada)』の構成を表にまとめると次の通りである。

(2) 『法句経(Dhammapada)』の構成

そこで『法句経(Dhammapada)』の構成は、26章423の詩より成り立つ。その構成の詳細は、第1章「ひと組みずつ」(1～20・20詩)、第2章「はげみ」(21～32・12詩)、第3章「心」(33～43・11詩)、第4章「花にちなんで」(44～59・16詩)、第5章「愚かな人」(60～75・16詩)、第6章「賢い人」(76～89・14詩)、第7章「真人」(90～99・10詩)、第8章「千という数にちなんで」(100～115・16詩)、第9章「悪」(116～128・13詩)、第10章「暴力」(129～145・17詩)、第11章「老いること」(146～156・11詩)、第12章「自己」(157～166・10詩)、第13章「世の中」(167～178・12詩)、第14章「ブツダ」(179～196・18詩)、第15章「楽しみ」(197～208・12詩)、第16章「愛するもの」(209～220・12詩)、第17章「怒り」(221～234・14詩)、第18章「汚れ」(235～255・21詩)、第19章「道を実践する人」(256～272・17詩)、第20章「道」(273～289・17詩)、第21章「さまざまなこと」(290～305・16詩)、第22

章	内容(中村 元訳)	内容(友松園諦訳)	詩	数
第1章	ひと組みずつ	隻要(ひとくみ)	1～20	20詩
第2章	はげみ	不放逸(はげみ)	21～32	12詩
第3章	心	心意(こころ)	33～43	11詩
第4章	花にちなんで	華(はな)	44～59	16詩
第5章	愚かな人	闇愚(おろかびと)	60～75	16詩
第6章	賢い人	賢哲(かしこきひと)	76～89	14詩
第7章	真人	阿羅漢(ひじり)	90～99	10詩
第8章	千という数にちなんで	述千(せんということ)	100～115	16詩
第9章	悪	悪行(あしきわざ)	116～128	13詩
第10章	暴力	刀杖(つるぎ)	129～145	17詩
第11章	老いること	老耄(おい)	146～156	11詩
第12章	自己	自己(おのれ)	157～166	10詩
第13章	世の中	世間(せけん)	167～178	12詩
第14章	ブツダ	仏陀(さとれるもの)	179～196	18詩
第15章	楽しみ	安寧(やすけさ)	197～208	12詩
第16章	愛するもの	好喜(たのしさ)	209～220	12詩
第17章	怒り	忿怒(いかり)	221～234	14詩
第18章	汚れ	塵垢(けがれ)	235～255	21詩
第19章	道を実践する人	住法(ただしさ)	256～272	17詩
第20章	道	道行(みち)	273～289	17詩
第21章	さまざまなこと	雑(さまざま)	290～305	16詩
第22章	地獄	地獄(あしきところ)	306～319	14詩
第23章	象	象(ぞう)	320～333	14詩
第24章	愛執	愛欲(あいよく)	334～359	26詩
第25章	修行僧	比丘(こうもの)	360～382	23詩
第26章	バラモン	婆羅門(ばらもん)	383～423	41詩

【『法句経』の構成】

### 3. 『法句經 (Dhammapada)』の「仏教保育」への展開

#### (一) 『法句經 (Dhammapada)』の「仏教保育三綱領」への三分類

仏教保育を提唱、実践している各幼稚園・保育所においては、多くの園が公益社団法人日本仏教保育協会が提唱する「仏教保育三綱領」(「慈心不殺」、「仏道成就」、「正業精進」)をその中心に掲げて教育・保育の指針としている。そこで本論では、『法句經 (Dhammapada)』に説かれる26章<sup>423</sup>の詩を詳細に検討し、その内容をなげ強引ではあるが「仏教保育三綱領」の三つに分類し、その教えを日常の教育・保育に生かすことができるようにすることを目的とする。その分類は次の通りである。<sup>(3)</sup>

#### ① 「慈心不殺」(明るく)〈仏〉―【生命尊重の保育を行おう】

「慈心不殺」に分類されるものは、第10章「暴力」の129・130・131・132・133・134・135・136・137・138・140・141・142・143・144・145の17詩であり、この章では仏教の非暴力、不殺生、不戦の思想について説かれ、人は誰でも暴力に怯え、自分の死を恐れ自らの生命を愛おしむ。それ故に他の人の生命も愛おしむことが必要であると説かれているものである。

また、第11章の「老いること」の146・147・148・149・150・151・152・153・154・155・156の11詩であり、この章では人生における真理の法について説かれ、この世のすべてのものは移り変わり、無常である。それ故に真理を体得し一瞬一瞬の自らの命を大切に生きていくことが大切であると説かれているものである。

#### ② 「仏道成就」(正しく)〈法〉―【正しきを見て絶えず進む保育を行おう】

「仏道成就」に分類されるものは、第1章「ひと組みずつ」の1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20の20詩であり、この章では二つの対になる詩によって対極から見た教えが説かれ、すべてのものは心によってつくりだされることについて説かれているものである。

また、第4章の「花にちなんで」の44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59の16詩であり、この章では花と香りに関する詩が集められており、欲望を制し善行を学びつとめる人が真理のことばを摘み取ることができると説かれているものである。

また、第5章の「愚かな人」の60・61・62・63・64・65・66・67・68・69・70・71・72・73・74・75の16詩であり、この章では自分は自分ではない愚かな人であることについて説かれ、自分ですら自分を思い通りに出来ない実体のない自分に気づくことが悩みから解放される方法であると説かれているものである。

また、第7章の「真人」の90・91・92・93・94・95・96・97・98・99の10詩であり、この章では物事の本質について説かれ、自己をととのえ束縛を離れた解脱の境地をめざすことの大切さが説かれているものである。

また、第14章「ブツダ」の179・180・181・182・183・184・185・186・187・188・189・190・191・192・193・194・195・196の18詩であり、この章では三宝に帰依し、浄く、正しい心で善行を行うことにより四つの真理(「四諦」)を見ることができると説かれているものである。

また、第15章「楽しみ」の197・198・199・200・201・202・203・204・

205・206・207・208の12詩であり、この章では人生における楽しみとは何かについて説かれ、お釈迦様の教えをもとに真理を体得することが大切であることが説かれているものである。

また、第18章「汚れ」の235・236・237・238・239・240・241・242・243・244・245・246・247・248・249・250・251・252・253・254・255の21詩であり、この章では「汝は」と目の前にいる「私」について説かれ、お釈迦様の教えに従って正しい道を進み、悪行を離れ善行を行うことにより生死を超えることが必要であると説かれているものである。

また、第20章「道」の273・274・275・276・277・278・279・280・281・282・283・284・285・286・287・288・289の17詩であり、この章では四つの真理（「四諦」）、「八正道」について説かれ、お釈迦様の説く道理に従い、戒律を守って自らを律し、清らかな道の実践をすることが大切であると説かれているものである。

③『正業精進』（仲良く）僧——良き社会人をつくる保育を行おう

「正業精進」に分類されるものは、第2章の「はげみ」の21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32の12詩であり、この章では不死と死の意味について説き、正しい生活を求め放逸に陥ることなく努力するところに心の平安がもたらされることについて説かれているものである。

また、第3章の「心」の33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43の11詩であり、この章では心とは何かについて説かれており、修行により平静な心を保つことが平安につながると説かれていているものである。

また、第6章「賢い人」の76・77・78・79・80・81・82・83・84・85・86・87・88・89の14詩であり、この章では賢い人とはどのような人であるかについて説かれ、心を正しくとのえ、数々の教えの中から真実を見極め、正しい道を進むことが大切であると説かれているものである。

また、第8章「千という数にちなんで」の100・101・102・103・104・105・106・107・108・109・110・111・112・113・114・115の16詩であり、この章では千という数にちなんだ教えのための手段について説かれ、自己に勝つことを学ぶことが大切であると説かれているものである。

また、第9章の「悪」の116・117・118・119・120・121・122・123・124・125・126・127・128の13詩であり、この章では善と悪について説かれ、悪を離れ、善をなすことの大切さについて説かれているものである。

また、第12章「自己」の157・158・159・160・161・162・163・164・165・166の10詩であり、この章では自己について説かれ、自分自身が主であり、自分を正しく調べ、そして他人を教え調えることが大切であると説かれているものである。

また、第13章「世間」の167・168・169・170・171・172・173・174・175・176・177・178の12詩であり、この章では死に臨むことについて説かれ、善い行いの道理に従って実行することにより死を乗り越えることができることと説かれているものである。

また、第16章「愛する者」の209・210・211・212・213・214・215・216・217・218・219・220の12詩であり、この章では愛するものについて説かれ、お釈迦様の正しい教えを習得することによって正しい

心で、正しい見解をもつて、真実を語り自分のなすべきことをなし、愛をむさぼらず、妄執を捨てるのが大切であると説かれて  
いるものである。

また、第17章「怒り」の 221・222・223・224・225・226・227・228・  
229・230・231・232・233・234の14詩であり、この章では人間の怒りに  
ついて説かれ、正しい修行をし、正しい考えをもつて、怒りに打  
ち勝つことが大切であると説かれているものである。

また、第19章「道を実践する人」の 256・257・258・259・260・  
261・262・263・264・265・266・267・268・269・270・271・272の17詩であり、こ  
の章では道を実践する人について説かれており、お釈迦様の教え  
に従い、常に精進して清らかな心を求めることが大切であると説  
かれているものである。

また、第21章「さまざまなこと」の 290・291・292・293・294・295・  
296・297・298・299・300・301・302・303・304・305の16詩であり、この章  
ではさまざまなことで、広大な楽しみを望んで、つまらぬ快樂を捨  
てよと説いて、自分の快樂を得るために、他人を苦しめるような  
ことはしてはならないと説かれているものである。

また、第22章「地獄」の 306・307・308・309・310・311・312・313・  
314・315・316・317・318・319の14詩であり、この章では善悪の基準に  
ついて説かれ、様々な条件によつて善悪の基準が変わる。そこで  
お釈迦様は淨らかな心で後悔をしないような生き方が大切である  
と説かれているものである。

また、第23章「象」の 320・321・322・323・324・325・326・327・328・  
329・330・331・332・333の14詩であり、この章では聡明な伴侶につい  
て説かれ、自分の心をととのえ、思慮深く聡明でまじめな生活を

している人を伴侶として共に歩むことが大切であると説かれてい  
るものである。

また、第24章「愛執」の 334・335・336・337・338・339・340・  
341・342・343・344・345・346・347・348・349・350・351・352・353・354・  
355・356・357・358・359の26詩であり、この章では愛執について説かれ、  
愛は苦の源となり、自分の心を浄め、執着から離れることはすべ  
ての苦しみに打ち勝つと説かれているものである。

また、第25章「修行僧」の 360・361・362・363・364・365・366・  
367・368・369・370・371・372・373・374・375・376・377・378・379・380・  
381・382の23詩であり、この章では修行僧について説かれ、自己こそ、自  
分の主であり、依りどころであり、それゆえに自己を整え自分の  
心を正しく調べていくことが大切であると説かれているものであ  
る。

また、第26章「バラモン」の 383・384・385・386・387・388・389・  
390・391・392・393・394・395・396・397・398・399・400・401・402・  
403・404・405・406・407・408・409・410・411・412・413・414・415・416・  
417・418・419・420・421・422・423の41詩であり、この章ではバラモンにつ  
いて説かれ、お釈迦様の説く真理に目覚め、正しい生き方をする  
ものがバラモンと呼ばれると説かれているものである。

## (2) 『法句経 (Dhammapada)』の「仏教保育」への展開

それでは『法句経 (Dhammapada)』の教えが仏教保育の実践に具  
体的にどのように展開できるかを考察する。本論では紙面の都合によ  
り、第10章「暴力」、第11章「老いること」の「慈心不殺」について  
のみの検討を試みる。この「慈心不殺」とは「生命尊重の保育を行お

う」というもので、公益社団法人日本仏教保育協会では、仏教の基本的な考え方として「仏教では人間だけでなく、草木にも、虫、鳥、獣にも、水や石や大地にも、すべて同じように仏性があると考える。」と述べ、<sup>4</sup>即ち、仏教でいう生命尊重とは、生きものの生命は勿論のこと、水、石などにも命があるように大切にすることであると説かれている。仏教保育を提唱、実践している各幼稚園・保育所においては、この「心不殺」の教えを教育・保育方針の第一に位置づけているものである。

まず、幼児教育の現場において、「命の尊厳」はどのように取り扱われているか、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』の中に示されている「命の尊厳」に関する項目・内容を挙げると次のようになる。

『幼稚園教育要領』においては、動植物や身近な事象を通して命の大切さを学ぶように設定されている。

・「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」

〔第2章 ねらい及び内容 環境 2 内容(5)〕

・「身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。」

〔第2章 ねらい及び内容 環境 3 内容の取扱い(3)〕

このように『幼稚園教育要領』の「第2章 ねらい及び内容」の領域「環境」に示されている。この領域「環境」の中で「命の尊厳」について触れているのは、身近な動植物を通して、その命の尊さ、生き物を思いやる気持ち、物の大切さ、自然に対する畏敬の念を教えてい

くことがその中心となっている。<sup>5</sup>

『保育所保育指針』においては、生命の尊厳に関する項目は、五歳児をはじめに六歳児まで段階的に取り扱っている。

・「周りにいる人たちがすべてかけがえのない存在であり、一人一人を尊重しなければならぬことに気づくように配慮する。(六歳児)」

〔第10章 六歳児の保育の内容5 配慮事項 「人間関係」(3)〕  
・「動植物との触れ合いや飼育・栽培などを通して、自分たちの生活との関わりに気づき、感謝の気持ちや生命を尊重する心が育つようにする。(六歳児)」

〔第10章 六歳児の保育の内容 5 配慮事項 「環境」(1)〕  
・「飼育・栽培を通して、動植物がどのようにして生きているのか、育つのか興味を持ち、生命が持つ不思議さに気づくようにする。(五歳児)」

〔第九章 五歳児の保育の内容 5 配慮事項 「環境」(1)〕  
このように『保育所保育指針』の「第九章五歳児の保育の内容」から「第10章六歳児の保育の内容」と段階的に取り上げられている。子どもは親しみを持てる動植物を見たり、触ったり、世話をすることなどを通して、親しみ、いたわりの気持ちを持ち、そして生命の尊さに気づく、保育者はそのきっかけを与えたり、動植物への関わり方を伝えていく必要がある。<sup>6</sup>

以上のように『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』の中に「命の尊厳」についての教育・保育内容が示されている。

次に、『法句経 (Dhammapada)』に説かれる「命の尊厳」に関わる内容について、第10章「暴力」、第11章「老いること」の全文訳を

挙げると次のようになる。(7)

第10章 「暴力」

129 すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

130 すべての者は暴力におびえる。すべての(生きもの)にとつて生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。

131 生きとし生ける者は幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害するならば、その人は自分の幸せをもとめていても、死後には幸せが得られない。

132 生きとし生ける者は幸せをもとめている。もしも暴力によって生きものを害しないならば、その人は自分の幸せをもとめているが、死後には幸せが得られる。

133 荒々しいことばを言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだことばは苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

134 こわれた鐘のように、声をあらげないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

135 牛飼いが棒をもって牛どもを牧場に駆り立てるように、老いと死とは生きとし生けるものどもの寿命を駆り立てる。しかし愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。浅はかな愚者は自分自身のしたことによって悩まされる。

— 火に焼きこがれた人のように。

137 140 手むかうことなく罪咎の無い人々に害を加えるならば、次に挙げる十種の場合のうちのどれかに速やかに出会うであろう

う、— (1) 激しい痛み、(2) 老衰、(3) 身体の傷害、(4) 重い病い、(5) 乱心、(6) 国王からの災い、(7) 恐ろしい告げ口、(8) 親族の滅亡と、(9) 財産の損失と、(10) その人の家を火が焼く。この愚かな者は、身やぶれてのちに、地獄に生まれる。

138 先ず自分を正しくとのえ、次いで他人を教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことがないであろう。

139 他人に教えるとおりに、自分でも行え。自分をよくとのえた人こそ、他人をととのえるであろう。自己は実に制し難い。

141 裸かの行も、髻に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲って動かないのも、— 疑いを離れていない人を浄めることはできない。

142 身の装いはどうあるうとも、行ない静かに、心おさまり、身をととのえて、慎みぶかく、行ない正しく、生きとし生けるものに対して暴力を用いない人こそ、(バラモン)とも、(道の人)とも、また(托鉢遍歴僧)ともいうべきである。

143 みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気につけないように、世の非難を気につけない人が、この世に誰か居るだろうか？

144 鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。信仰により、戒しめにより、はげみにより、精神統一により、真理を確かを知ることに、知恵と行ないを完成した人々は、思念をこらし、この少なからぬ苦しみを除けよ。

145 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯め、慎しみ深い人々は自己をととのえる。

第10章「暴力」においては、仏教の非暴力、不殺生、不戦の思想について説かれ、人は誰でも暴力に怯え、自らの死を恐れ、自らの生命



を愛おしむ。それ故に他人の生命も愛おしむことが必要であると説かれていた。さらに自分を正しく調え、そして他人を導くことが大切であるとし、他人を導く通りに自分も行おうことが大切であると説いている。そして自分を調べて、正しい行いを実践し、生きとし生けるものに対して暴力を用いない人こそが完成された人（「仏」と呼ばれ、そのような人は煩悩、悩みを乗り越えた人であると説かれているものがある。保育の現場においても同様に、正しい見識をもって他人を導き、自分の命のみならず、他のすべての生き物の命を尊重し、愛おしむ姿、そして『法句経(Dhammapada)』に説かれる仏教の非暴力、不殺生、不戦の思想を子どもたちに伝えていくことが大切であるといえる。

## 第11章 「老いること」

146 何の笑いがあろうか。何の欲びがあろうか？―世間は常に燃え立っているのに―。汝らは暗黒に覆われている。どうして燈明を求めないのか？

147 見よ、粉飾された形体を―（それは）傷だらけの身体であって、いろいろのものが集まっただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。

148 この容色は衰えはてた。病いの巢であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する。

149 秋に投げすてられた瓢箪のような、鳩の色のようなこの白い骨を見ては、なんの快さがあるか？

150 骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりとごまかしとがおさめられている。

151 いたも麗わしき国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近

づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いにことわりを説き聞かせる。

152 学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。かれの肉は増えるが、かれの知恵は増えない。

153 わたくしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益に経めぐつて来た、―家屋の作者をさがしとめて―。あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである。

154 家屋の作者よ―汝の正体は見られてしまった。汝はもはや家屋を作ることはないのであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。心は形成作用を離れて、妄執を滅ぼし尽くした。

155 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、魚のいなくなった池にいる白鷺のように、痩せて滅びてしまう。

156 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、壊れた弓のようによこたわる。―昔のことばかり思い出してかこちながら。

第11章「老いること」においては、人生における真理の法について説かれ、この世のすべてのものは移り変わり無常である。それ故に真理を体得し、一瞬一瞬の命を大切に生きていくことが大切であると説かれていた。即ち、我々の日常生活は、常に樂を求めて生活をしている。それ故に、この世は無常であり、常に移り変わっているという事実（「真理」）に気づき、自分を律し、正しい生活につとめることが大切で、お釈迦様の説く真理の法を体得することが必要であると説かれている。保育の現場においても、生きとし生けるものの命を尊び、正

しい生活を実現し、一瞬一瞬の命を大切に、日々の正しい生命を実現することの大切さを子どもたちに伝えていくことが必要であるといえる。

以上のように『法句経(Dhammapada)』に説かれる「命の尊厳」の教えが、公益社団法人日本仏教保育協会の提唱する「仏教保育三綱領」の「慈心不殺(生命尊重の保育を行おう)」に確実に展開することができる、そして他の「仏道成就」、「正業精進」においても同様に展開することができる。

#### 4. まとめ

本論において、古来より多くの仏教徒に広く読誦されてきた『法句経(Dhammapada)』の教えを「仏教保育三綱領」(「慈心不殺」、「仏道成就」、「正業精進」)に分類し、その教えを教育・保育の現場に展開し、保育者の資助となる教えを導き出し、日常の教育・保育に生かすことができるようにすることを目的に考察を進めた。さらに『法句経(Dhammapada)』の教えを「仏教保育三綱領」の「慈心不殺」への具体的な展開を試みた。その結果『法句経(Dhammapada)』の教えが確実に保育の現場に展開することができた。本論では、紙面の都合上「慈心不殺」の一部のみの展開ではあったが、『法句経(Dhammapada)』の教えは真の人間を的確に捉え、人間の優しさ、命の尊さ、愛の大切さなど、人間の持つ価値が的確に表現されているものであり、確実に保育者の日々の保育の具体的な示唆となり得る教えであるといえる。

今後の課題としては、仏教の教えに基づき、仏教保育の中に数多くの教材をより具体的に保育者に提供していくことであると考えている。

#### 【註】

(1)平成29年6月(7月末回答期限)に、関東一都六県の公益社団法人日本仏教保育協会に加盟し、仏教保育を提唱し、実践している幼稚園・保育所にご協力をいただき「仏教保育アンケート」を実施した。本アンケートは430園に配布し、97園からの回答(回収率26%)をいただいたものである。仏教保育を提唱し、実践している各園の教育・保育方針は、今回の「仏教保育アンケート」に回答をいただいた各園の教育・保育指針に基づいている。また「仏教保育アンケート」の詳細な結果の報告については、紙面の都合により他の機会に譲る。

(2)日本仏教保育協会編『仏教保育総論』(チャイルド本社)二〇〇四年二月初版 p 14～p 15

(3)本稿の各章の章題は、中村 元訳「真理のことは 感興のことば」岩波文庫(岩波書店)に準ずる。

(4)前掲 註(2) p 14

(5)拙論「仏教保育における「命の尊厳」について―『典座教訓』の「三心」を通して―」(『駒沢女子短期大学研究紀要』第五十号 二〇一七年三月) p IVにおいて『幼稚園教育要領』に示されている「命の尊厳」について、次のように述べている。

「(一)の『幼稚園教育要領』において、「命の尊厳」に言及している部分は、「第2章 ねらい及び内容」の領域「環境」に限定されている。「環境」は『幼稚園教育要領』の中で「身近な環境とのかかわりに関する領域」と定義され、そのねらいの中心は、身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つところにある。そして自然に触れ

て生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気づくことが領域「環境」の中心といえる。即ち、この領域「環境」の中で「命の尊厳」について触れているのは、身近な動植物を通して、その命の尊さ、生き物を思いやる気持ち、物の大切さ、自然に対する畏敬の念を教えることがその中心となっている。」

(6) 前掲 註(5) 拙論p.Vに『保育所保育指針』に示されている「命の尊厳」について、次のように述べている。

「子どもは親しみを持てる動植物を見たり、触ったり、世話をすることを通して、親しみ、いたわりの気持ちを持ち、そして生命の尊さに気づく、保育者はそのきっかけを与えたり、動植物への関わり方を伝えていく必要がある。保育所では、幼稚園と同様に身近な動植物を通し、その命の尊さ、愛護の気持ち、感謝・いたわりの気持ちなどを教えていくことの大切さが説かれている。また、飼育・栽培を通して自然に対する「畏敬の念」を育てるように説かれている。また、「命の尊厳」について「子どもの生命を守る」ことにも言及され、特に虐待から子どもの生命を守ることに説かれている。保育所においても子どもの主体性を尊重し、子どもの生きる力、伸びようとする力を支え、一人ひとりの子どもの発達過程を踏まえて育てていくことが大切であるといえる。」

(7) 『法句経(Dhammapada)』の訳文は、中村 元訳『真理のことは 感興のことは』岩波文庫(岩波書店)に準ずる。また、文中の傍線は筆者によるものである。

#### 【参考文献・資料】

- ・『大正新脩大藏経』本縁部(下) 第4巻
- ・中村 元『佛教語大辞典』(東京書籍)
- ・友松園諦『法句経』(講談社学術文庫)
- ・友松園諦『法句経講義』(第一書房)
- ・中村 元訳『ブツダの真理のことは 感興のことは』岩波文庫(岩波書店)
- ・荻原雲来訳注『法句経』岩波文庫(岩波書店)
- ・水野弘元・中村元・平川彰・玉城康四郎編集『仏典解題事典(第二版)』(春秋社)
- ・日本仏教保育協会編『仏教保育総論』(チャイルド本社)
- ・上村映雄『仏教保育ハンドブック』(創作出版社)
- ・『幼稚園教育要領』(文部科学省)
- ・『保育所保育指針』(厚生労働省)
- ・『保育所保育指針解説書』(厚生労働省編)
- ・無藤 隆『幼稚園教育要領の基本と解説』(フレーベル館)
- ・田中敏明『幼稚園・保育所指導計画作成と実践のためのねらいと内容集』(北大路書房)
- ・小田 豊・山崎 晃監修『幼児学用語集』(北大路書房)
- ・岡本啓宏「仏教保育における「命の尊厳」について―『典座教訓』の「三心」を通して―」(『駒沢女子短期大学研究紀要』第五十号 二〇一七年三月)
- ・公益社団法人 日本仏教保育協会  
<http://www.buppo.com/index.html>

